

原田種成著「私の漢文講義」大修館書店 1995年10月1日刊を読む

朗読・暗誦のすすめ

1. 漢文の訓読は文語文で読むものであるから、その口調に習熟するためには、朗読・暗誦によらねばならない。漢文の教科書や参考書には送り仮名がついているから、そのとおりに読めば、一応の読みはできるが、朗読・暗誦によって読み方に習熟していないと、ごく簡単な種類の熟語すらも訓読することができない。
2. 近ごろの大学生は高校時代にそうした経験を持たないものが多いのは遺憾である。一人二人、生徒を指名して読ませたあと、教師が一度読んだだけで読み終わらせるというような授業では漢文の読みの学習としては不十分である。必ず教室の全員が声をそろえて音読する斉読(近ごろは群読というようである)をして読みを完成することが必要である。斉読させれば全員の生徒が毎時間声を出して読むことができる。教師の範読もまた朗々と読んでやる必要がある。漢文の授業をただ解釈をただけで能事^{おわ}畢れりと思っはならない。生徒が声を出してすらすらと読めるようになるまでにしなければ漢文の授業にはならない。
3. その上に暗誦を課すことも必要である。詩や韻文の類はぜひとも暗誦をしなければならない。暗誦をするには声を出さなければならない。自分の声を自分の耳から入れることが肝要である。最近心理学者が、受験勉強などの場合、黙読よりも音読したほうがよく覚えられるという研究調査の結果を報告していた。
4. なお、生徒に暗誦を課したならば、教師も暗誦し、生徒と同様に本を伏せて読んでほしい。私が旧制中学の教師をしていたとき、生徒に負けないように学校の往復に一心に暗誦し、赤壁賦、岳陽樓記、柳子厚墓誌銘、長恨歌、琵琶行などを暗誦したものである。教師は同じ課を何教室でも教えるのだから、相当に長い文でも暗誦することは容易である。
5. 暗誦をすると豊富に語彙の習得ができ、文章の照応も身につけて、作文の力が高まる効果があることも生徒に知らせて、暗誦に力を入れさせるのがよい。古文の場合も、『徒然草』、『^{まくらのそうし}枕草子』、『源氏物語』、『平家物語』、『方丈記』など代表的な古典十種類の冒頭を暗誦すると、古文に強くなるとはよく言われていることである。

6. 戦後の教育で、古典がないアメリカの教育学者の言うことを無批判に鵜呑みにし、暗記は理解を妨げるといって、指導要領に朗読も暗誦も課さなくしてしまったが、戦後の日本語の乱れの最大の原因は朗読と暗誦を廃したところにある。

7. 世界で最も自国語を愛する国といわれているフランスの小学校について、鹿住稔子氏は、

時間割はきまっていないが、カリキュラムや科目はちゃんとある。ただし、正課の三分の二までが国語である。読解、書き方(正書法)、書きとり、作文、口語表現法、文法、活用の暗記、詩の暗誦、というふうに徹底した自国語教育がおこなわれる。

読本もそうだが、フランスの小学校では本物しか子供に与えない、という印象を強く持った。やさしく書きかえた抜萃を決して与えない。ことに詩は書きかえがきかないし、子供用に書かれた詩というのもあまりない。……ヴェルレエヌ、アポリネール、ヴェルハアレン、マラルメなどをじかに、生のまま与えるわけである。

“意味はわからなくてかまわない。説明もしない。丸暗記して、リズムや雰囲気がつかめればよい”のだそうである。(『ママのわがまま留学』冬樹社)

8. 先年、朝日新聞に連載された田辺聖子の“^{ふぐるま}文車日記”に「このごろの少年少女に、すぐれた古典の一節を暗誦させないのはなぜでしょうか」といい、暗記した古典が後年になって生き返り生涯の血肉となると言っており、翌日の“天声人語”もそれに賛成していたが、私は、古典の暗誦は、情動的な方面だけではなく、文を書く上に極めて必要であることを強調したい。

9. 今の若い者は意味の通じる文が書けないと言われるが、私はその最大の原因が古典の暗誦を排したことにあると思っている。

10. 暗記は理解を妨げ、創造性の芽をつむというのは、理科や社会科についての問題である。それを無批判に国語教育に持ち込んだことがそもそもの誤りである。古典を暗誦することによって日本語のリズムや文理文脈が自然に身につく、多くの言葉を覚えられる。それによって正しい日本語を使うことができ、覚えた言葉を用いて意味の通る文が書けるようになるのである。

P30 ~ 35

[コメント]

「漢文こそ日本の古典」と漢文教育の重要性を生涯を通じて説き続けた原田種成先生は、朗読と暗誦の大切さをこの文章で強調している。学ぶ者も教える者も大いに参考にすべきと考える。

- 2009年2月14日林明夫記 -